

平成 29 年 4 月 27 日現在

機関番号：23903

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590042

研究課題名(和文)主観的幸福度の決定要因の解明：リアルタイム幸福度データによる検証

研究課題名(英文)The Investigation of Subjective Well-beings: A Survey Data Analysis

研究代表者

坂和 秀晃(Sakawa, Hideaki)

名古屋市立大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：70513125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、ESM(Experienced Sample Methods)法を用いる形で、大学生70名の「主観的幸福度」に関するパネルデータを作成して、人々の幸福度の行動による影響と日中変動についての考察を行った。特に、「行動が、主観的幸福度にどのように影響するか?」という点と「日中の時間変動が、人々の主観的幸福度にどのように影響するか?」という2点に注目した実証分析を行っている。ESM法を用いた同分析の初期的な結果は、行動経済学会での研究報告を行い、「研究奨励賞」を受賞した。その後、研究内容の深化を行い、論文としてまとめて、学術誌に投稿中の状況である。

研究成果の概要(英文)：This research project tried to investigate whether or not the level of subjective happiness are varied on the intraday time and activity. Using of Experienced sample methods (ESM), we constructed the panel data of 70 university students which includes their intraday happiness level and intraday activity. Especially, we focused on following research questions that “How subjective happiness are affected by the activity during a day” and “How subjective happiness are changed by the intraday time”. Our primary results were awarded by “Association of Behavioral Economics and Finance”. In addition, we developed the primary results and have submitted it to the academic Journal.

研究分野：Economics

キーワード：Happiness Activity Survey

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景としては、経済発展と主観的幸福度の関係性が、疑問視されていたことがある。戦後の我が国の経済発展に伴い、GDP が飛躍的に伸び、国民生活が豊かになったといわれる一方で、個人の満足度が高まっていないのではないかという指摘がなされることが多かった。実際、米国の研究機関の調査によっても、我が国の戦後の生活満足度は大きく変化していないことが明らかになっている。このような状況の中で、経済的な豊かさにとどまらない人々の満足度を示す主観的幸福度が、経済政策上の重要な指標として認識されるようになっていた。

経済政策上の指標としての使用を考える際には、指標として、より精度の高い測定を行うことが重要になってくる。しかしながら、主観的幸福度の測定については、アンケート調査を行う必要があり、被験者の様々な状況によるバイアスを伴うことが多い。その意味で、リアルタイムの状況変化による主観的幸福度の推移があるのかどうか、といった点を検証することが重要になってくる。本研究課題では、その点に着目して、リアルタイム幸福度データを利用した実証研究を行うことで、研究活動の開始を行っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、主観的幸福度の決定要因について、個々の被験者により発生する可能性のある様々なバイアスを加味して、できるだけ正確に検証を行うことにある。主観的幸福度の測定については、経済学の分野では、0点から10点までの多段階評価でのアンケートによって、アンケートの回答者からの報告地を主観的幸福度とする方法が一般的であった。

主観的幸福度の研究が進展する状況の中で、Kahneman et al. (2004, Science)の研究などでは、主観的幸福度の被験者の報告数値自体が、「被験者が直前に何をしていたか?」という被験者の行動や「被験者の性別などの被験者の属性」あるいは「被験者の主観的幸福度の報告時点がいつか?」といった日中時間などによって、変動する可能性を指摘している。先行研究では、そのようなバイアスを小さくするために、いくつかの異なる測定方法が提案されてきた。

主観的幸福度の測定方法としては、ESM法 (Experience Sampling Method) と呼ばれる主観的幸福度の測定方法がより精緻な測定を行えることで知られている。ESM法では、主観的幸福度を報告する瞬間の被験者の状態による影響を加味したうえで、より正確な主観的幸福度の測定を目的としており、被験者の記憶違いによる主観的幸福度への

バイアスや状況に左右された短期的な主観的幸福度へのバイアスといったものをできるだけ排除することがその測定目的となっている。

ESM法には、代表的な測定方法として、以下の2種類に分かれる。一つは、EMA法 (Ecological Momentary Assessment) と呼ばれる方法で、被験者自身が置かれた環境とその影響を考慮する方法である。具体的には、主観的幸福度の報告を行う被験者のコルチゾール (Cortisol) 量の測定を同時に行うことで、被験者のストレス強度を知り、主観的幸福度の数値との関係性を考察するという方法である。同方法は、被験者の主観的幸福度に影響を及ぼす心理的要因が判明するという意味での優位性はあるものの、実験自体の規模が大規模になり、コストが高いといった問題点を抱えている。

もう一つの方法は、DRM法 (Daily Reconstruction Method) と呼ばれる方法である。DRM法は、記憶バイアスを防ぐための主観的幸福度の測定方法である。被験者は、前日の出来事についての日記をつける。その際に、前日の「何時に何をしたのか?」という点を記録する。その記録にもとづいて、その時間の主観的幸福度がどれくらいであったかを報告するという方法になる。したがって、被験者の記憶バイアスをできる限り少なくした状況での主観的幸福度の測定が可能になる。この方法のメリットとしては、EMA法に比して、コストが安価である点があげられる。その意味で、本研究では、DRM法に注目して、主観的幸福度の測定方法を勘案している。

本研究では、主観的幸福度をより正確に測定するために、ESM法を改良した方法を用いている。DRM法とは異なり、携帯電話を用いることにより、被験者のリアルタイムでの主観的幸福度測定を可能にしていることが特徴である。この方法により、主観的幸福度の測定をより正確に行うと同時に、主観的幸福度の決定要因についても、明らかにすることを研究目的としている。

3. 研究の方法

本研究の方法は、本研究で提案された主観的幸福度の測定方法に基づき、測定された主観的幸福度が、日中変動、祝日、平日の相違、月次効果、回答者の行動、回答者の性別、などによって異なるのかどうかということを明らかにするために、取得したデータに関する実証分析を行うことである。

主観的幸福度の調査に関しては、「大阪大学」報告対象は、1年半余りの期間に渡る大

学生 70 名余りのサンプルとなっている。測定を行った期間中においては、最低 1 か月に 1 回のペースで主観的幸福度の報告を行うように設計している。加えて、報告日には、1 日に 10 回以上の主観的幸福度とその直前の行動を報告することなどを義務付けている。直前の行動に関する項目としては、23 項目にカテゴライズしており、「余暇」あるいは「学習」に類する項目が数多く含まれている。このような継続調査の結果として、サンプルとなる回答者については、1 か月に 1 日以上の頻度で、日中の主観的幸福度とその直前の行動のデータが得られることになる。スマートフォンを用いた調査であるために、リアルタイムで主観的幸福度のデータを得られることも、本研究で採用した方法論の強みになっている。

上記のデータに関しては、回答者がスマートフォンでの回答を行うために、70 名のパネルデータとして、データ化することが可能になる。主観的幸福度に関しては、ESM 法での調査となっているが、スマートフォンでのリアルタイムでの状況・直前の行動に関するデータが得られることから、DRM 法において残存する可能性のある記憶バイアスが最大程度、除去できると想定される。一方で、心理状況については、十分なデータを得られないという方法論の弱点はある。

本研究では、上記のようにして得られたパネルデータを用いて、実証研究を行う。具体的には、リアルタイムでの主観的幸福度の推移が有意な変動であるのか、リアルタイムの主観的幸福度の決定要因として、「行動」あるいは「日中時間変動による心理的変動」などがあるのか、といった点を検証するためのパネルデータ分析を行う。

4. 研究成果

本研究では、リアルタイムの主観的幸福度のパネルデータを用いた実証分析を行った。実証分析により、得られた結果は、以下のようによまとめることができる。第一に、直前の行動による主観的幸福度の大きさが影響を受けることを明らかになった。概ね、「レジャー」活動に属する行動後の方が、主観的幸福度が高くなる傾向にあることが分かった。レジャーの中でも、友人などとともに楽しむタイプの行動が有意であるような傾向があった。この結果については、リアルタイムの幸福度の変動とは独立に観測されるものになる。

第二に、リアルタイムの幸福度の変動の推移を調べたところ、早朝・夜間遅くといった期間の幸福度の落ち込みパターンが発見された。この時間パターンは、Kahneman et al. (2004) と類似の結果になっている。一方で、

Kahneman et al. (2004) で観察されるような昼休み後の主観的幸福度の落ち込みパターンなどは、見られなかった。Kahneman et al. (2004) の結果では、女性のみを対象とした調査を行っているために、このような相違が生じた可能性があるために、性差を加味して、男女別のサンプルに分けた分析を行っても、特に結果は変わらなかった。この結果は、日本人の場合、主観的幸福度の日中時間パターンが異なる可能性を示唆している。

第三に、主観的幸福度の時間パターンについては、直前の行動による気分変化などを加味した推定を行っても、有意な結果が観察されることが明らかになった。又、性差を加味すると、女性の方が、より時間パターンは大きいことが明らかになった。これらの結果は、リアルタイム幸福度の変動が確かなものであることを示唆している。

本研究で得られたこれらの実証結果については、萌芽的な内容を『行動経済学』に出版している。又、その内容を「行動経済学会」で学会報告して、「行動経済学会奨励賞」を頂くことができた。一方で、学会や研究会等でのコメントでは、推定に関する点などを指摘されたことから、それらを修正した形で論文を執筆し、現在は学術誌に投稿中の段階である。

本研究では、リアルタイム幸福度の時間パターンと決定要因を検証した。一方で、これらの時間パターンの変動が国民性によるのか、あるいはもっと他の要因によるのか？といった点についての検証の余地がある。それらの点について、さらなる検証を進めていく必要がある。今後の研究課題として、重要なテーマであると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

[1]. Sakawa, Hideaki, Ohtake, Fumio, and Tsutsui Yoshiro “Activity, Time, and Subjective Happiness: An Analysis Based on An Hourly Web Survey”, 『行動経済学』第 7 巻 84 - 87 頁(査読有)

[2]. Sakawa, Hideaki, Ohtake, Fumio, and Tsutsui Yoshiro “Activity, Time, and Subjective Happiness: An Analysis Based on An Hourly Web Survey”, ISER Discussion Paper (査読無)

[学会発表](計 2 件)

Sakawa, Hideaki, Ohtake, Fumio, and Tsutsui Yoshiro “Activity, Time, and Subjective Happiness: An Analysis Based on

An Hourly Web Survey” 行動経済学会第 8 回
大会報告、慶應義塾大学、2014 年 12 月 8 日

Sakawa, Hideaki, Ohtake, Fumio, and
Tsutsui Yoshiro “Activity, Time, and
Subjective Happiness: An Analysis Based on
An Hourly Web Survey”、MEW 研究会報告、
甲南大学、2015 年 3 月 28 日

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

坂和 秀晃 (SAKAWA Hideaki)

名古屋市立大学・大学院経済学研究科・准
教授

研究者番号：70513125